

# 「童謡」の概念再考 “Childlike, though Never Childish”

## ——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——

ムティグリナ スベトラーナ  
Mutygullina Svetlana

日本の詩歌といえば短歌や俳句が代表とされるが、重要な近代詩の一ジャンルとして「童謡」がある。とりわけ、金子みすゞの童謡は日本人の感性に深く根付いている。みすゞの詩は多言語に翻訳されているが、ロシア語訳はまだ存在せず、ロシアにおける日本の童謡研究も限定的である。発表者は、西洋の詩の理論に依拠して、みすゞの童謡の韻律上の特徴を明らかにし、それを活かすロシア語訳を作成している（「研究業績」別紙参照）。その研究過程で、日本独自の「童謡」の概念を明確にし、西洋の児童詩との違いを解明する必要があると考えた。

西洋の日本文学研究においては、童謡は“Nursery Rhymes”や“Children Songs”に分類されるが、果たしてそれで十分であろうか。

本発表は、「童謡」の独自性を再考し、ロシア文学および西洋文学における児童詩と比較しながらその特質を明確にすることを目指す。その方法として第一に、大正期の児童雑誌『赤い鳥』『童話』、及び畑中圭一『日本の童謡』、井上英二『童謡百年史』における「童謡」観を考察する。第二に、20世紀ロシアの児童文学の特性を示す、ソ連期の児童文学理論家 K.チュコフスキーの『2歳から5歳まで』や、日本の大正期の童謡運動に影響を与えた『マザーグース』、金子みすゞの作風と比較される19世紀ヴィクトリア朝詩人 K.ロセッティの詩とその日本語訳を参照する。

以上の方法を通じて、西洋近代における〈子供〉の誕生（P.アリエス）に基づく西洋の児童詩と、日本文学の近代化の中で生まれた「童謡」が、大人から子どもを分かち点で共通する一方、北原白秋・西條八十らの「童謡」が実は大人も読者としている（「童謡」によって大人を対象とする詩では表現できないものを表現する）ことが指摘できる。

児童詩の枠組みを超える作品が、地域を超えて生み出されていた点に注目したい。本発表は、日本の「童謡」を通じて、近代社会で一般化した児童詩の概念を見直すことを最終的な目標とする。

## 「童謡」の概念再考“Childlike, though Never Childish”

——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——

青山学院大学

ムティグリナスベトラーナ  
Mutygullina Svetlana

### はじめに

金子みすゞは、大正期の児童雑誌『童話』をはじめ、『婦人倶楽部』や『赤い鳥』に詩を投稿し、童謡詩人として文学活動を展開した。現在では、日本の小学校でその詩が教材として採用されるなど、子ども向けの詩人としてのイメージが定着している。また、金子みすゞの詩の翻訳本に目を向けると、華やかな挿絵とともに「幼児向けの読みもの」として紹介されることが多く、あるいは「平易な詩集の翻訳」として扱われる傾向にある。しかし、堀切実や木原豊美によれば、みすゞは「単なる童謡詩人ではなく」、「近代詩の一角を占める大人の詩人として認められるべき存在である」<sup>1</sup>とされる。さらに、Alice Major も「彼女の詩に響く声はしばしば子どもらしいが、決して子どもじみてはいない (The voice in her (Misuzu) work may often be child-like, but it is never childish)」<sup>2</sup>と指摘する。本発表では、これらの先行研究に賛同しつつ、金子みすゞの作品を近代詩として再考する。

現代文学における金子みすゞの位置付けを明確にするため、まず二十世紀初頭における「子ども」の捉えられ方を整理し、当時の世界の児童文学および日本の童話・童謡の発展段階を概観する。次に、日本とロシアの児童文学論を比較し、日本の童謡の特質を明らかにする。そして最後に、金子みすゞの詩4編を取り上げ、その作風の特徴を検討する。

### 二十世紀までの児童文学の様子

二十世紀以前、「子ども」や「幼年期」に対する特別な扱いは一般的ではなかった。これは、子どもの高い死亡率や医療・技術の未発達と深く関わる世界的な現象である。子ども観の変化は、J.J.ルソー (1712~1778) の『エミール』(1762年)に端を発するとされるが、当時は「子どもを理想化し、愛情をもって育てる」考え方は受け入れられておらず、むしろ異端視されていた。しかし、『エミール』の教育思想は、十九世紀以降の子育てや教育に大きな影響を与えた。

また、当時の児童文学には、現在のような「子ども向け」の明確な枠組みがなく、子守唄や言葉遊び、おとぎ話、歌謡などの民謡文学が中心だった。十八~十九世紀には、J.ニューベリーの『マザーグース』(1765年)、H.C.アンデルセン (1805~1875)、グリム兄弟 (1785~1863/1786~1859)、K.ロッセティ (1830~1894)らの作品が登場した。これらは伝承民謡や伝説を基にしつつ、暗い現実を描くことも多かった。同時代のC.ディケンズ (1812~1870) の『オリヴァー・ツイスト』(1837~1839)も、児童文学とされるが、もともとは社会批判の文脈で書かれたものである。

十九世紀後半になると、リアリズムを残しつつ子ども時代の楽しさを描く作品が生まれる。L.キャロル (1832~1898) の『不思議の国のアリス』(1865)、M.トウェイン (1835

～1910) の『トム・ソーヤーの冒険』(1876)、J.M.バリー (1860～1937) の『ピーターとウェンディ』(1911) などが代表的である。これらの作品は児童文学や児童文化に影響を与え、日本の童謡の発展にも寄与した<sup>3</sup>。

## 日本における 1920 年代の童話・童謡の展開

金子みすゞは大正 12 年 (1923)、児童雑誌『童話』9 月号に「お魚」を発表し、昭和 4 年 (1929) までに『婦人倶楽部』『金の星』『赤い鳥』『愛誦』などに 80 編以上を投稿した<sup>4</sup>。

日本の童話・童謡運動は、大正 7 年創刊の『赤い鳥』を起点とし、北原白秋 (浪漫主義) と西條八十 (象徴主義) が主導した。彼らは西洋詩の影響を受けながら、日本の伝統詩歌 (歌謡) と結びつけ、新たな詩の形を模索し、「童謡」と名付けた。

『赤い鳥』の作家たちは童話を「子どものため」に限定せず、普遍的な文学と捉えていた。小川未明は「童話は童心を失わないすべての人のための文学」、秋田雨雀は「人類の『永遠の子ども』のためのもの」とし、島崎藤村も「童心を基調とする文学形式」と位置づけた<sup>5</sup>。

北原白秋は、童謡を「童心童謡の歌謡」と定義した。また、日本のわらべ歌の詩形式や仏教的「自他一如」の思想を童謡の本質と捉え、「童謡は児童の幻想を歌うだけでなく、自己の芸術を高める行為である」と考えた<sup>6</sup>。西條八十もまた、童謡は「詩人の芸術理念が透徹しているべき」と述べ、単なる子ども向け表現にとどまらない芸術性を追求した<sup>7</sup>。

『赤い鳥』の読者層について田中卓也は、「小学生向けながら、実際には大人読者の方が多く、総合雑誌化を迫られていた」と指摘している<sup>8</sup>。一方、同時期のソ連では、K.チュコフスキー (1882～1969) が「死や悲しみは子どもにふさわしくない」と主張し、対象読者を明確にした<sup>9</sup>。しかし、北原、西條、チュコフスキーの三者は「児童向けであっても詩は常に詩である」という点で一致していた。

以上を踏まえると、日本の童謡は小さな子ども向けの作品を含むが、現代の児童文学の枠には収まりきらない。そのため、「児童文学」ではなく、「歌謡風の近代詩」として考察するのが適切である。

## 金子みすゞの詩の〈童心〉

金子みすゞの作品は、童謡の流れを受け継ぎつつも、生まれ育ちの仙崎村 (山口県長門市) の伝統や仏教的世界観を背景に独自の詩を創作した。同氏は子どもの視点を借りながら、大人の読者にも訴えかける「寂しさ」「生と死」などのテーマについて作品を生み出した。その中から 4 編を取り上げる。(以下、『金子みすゞ童謡全集』を参照する<sup>10</sup>)

「仏さまのお國」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、292 頁】

おなじところへゆくのなら、/み仏さまはたれよりか、/わたくしたちがお好きなの。//  
あんない子の花たちや、/みんなにいい唄きかせてて、/鉄砲てっぽうで射たれる鳥たちと、/おなじところへゆくのなら。//ちがうところへゆくのなら、/わたくしたちの行くところは、/一ぱ

んひくいところなのよ。//—ばんひくいところだって、/私たちには行けないの。/それは、支那より遠いから、/それは、星より高いから。

高橋美帆にによれば、この詩は、みすゞが気に入った詩を『琅玕集』手帳に書き写したK.ロセッティの「いと低きところ」(“The Lowest Place”, 1863) という作品には共通した雰囲気を感じられるという<sup>11</sup>。ロセッティの原詩は児童詩ではなく宗教詩であり、宗教的な感覚は女性詩人に共通する要素の一つと考えられる。みすゞの詩にも、自らの死を意識したり、身の回りの死を悲しむ内容が多く見られる。

「繭とお墓」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、141 頁】

蚕かいこは繭まゆに/はいります、/きゅうくつそうな/あの繭に。//けれど、蚕は/うれしかろ、  
蝶ちょうちょう々々になって/飛べるのよ。//人はお墓へ/はいります、/暗いさみしい/あの墓へ。//そ  
して、いい子は/翅が生え、/天使になって/飛べるのよ。

みすゞの作品には仏教的な要素だけでなく、キリスト教の象徴も表れている。堀切実の研究によると、みすゞは『赤い鳥』に掲載されたアンデルセンの「天使」や、ヒューゴの「薔薇と墓」に感動し、これらのイメージを自身の詩作に取り入れていたという<sup>12</sup>。これらの原作はいずれも児童詩ではなく、小さな子を亡くした親の悲しみや、恋人を失った者の嘆きが描かれている作品である。みすゞの詩もまた、親が子どもに死について優しく語りかける作品として解釈できる。

「わらい」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、227 頁】

それはきれいな薔薇ばらばらいろで、/芥子けしつぶよりかちいさくて、/こぼれて土に落ちた  
とき、/ぱっと花火がはじけるように、/おおきな花がひらくのよ。//もしも 涙なみだがこ  
ぼれるように、/こんな笑いがこぼれたら、/どんなに、どんなに、きれいでしょ。

みすゞの詩は、同声合唱曲集『このみちをゆこうよ』(カワイ出版、2016 年)にも収録されており、子どもが歌う機会もある。しかし、その内容には人生の苦しみや悲しみを深く理解した大人の視点が含まれている。

「さよなら」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、132 頁】

降りる子は海に、/乗る子は山に。//船はさんばしに、/さんばしは船に。//鐘の音は鐘  
に、/けむりは町に。//町は屋間に、/夕日は空に。//私もしましょ、/さよならしましょ。  
//きょうの私に/さよならしましょ。

「今日の私」はどんな人か——この問いに、大人でさえ答えに窮することがある。みすゞの詩に見られる問いかけは、小さな子どもというよりも、思春期の青年の成長や内面的な葛藤に近いのかもしれない。失望や失敗を経験しながら、過去の自分と決別し、新たな自

分へと生まれ変わろうとする意志がそこには感じられる。

## むすび

日本の童謡は、西洋の十八～十九世紀の児童文学および浪漫主義の詩人の理想の影響を受けつつ、日本独自のテーマや形式を取り入れ、子どもだけでなく幅広い読者を対象とした「歌謡風の近代詩」として発展した。なかでも金子みすゞの童謡は、口語的な表現を多用しながらも、「宇宙の在り方」や「自然と人間の関係」といった宗教・哲学的な問題を内包し、「孤独」や「生と死」といった、単に子どもを楽しませるだけではないテーマを扱っている。そのため、みすゞの詩は、単なる児童向けの作品ではなく、自己や世界について理解を深めつつある青年層にも響く内容であると言える。

こうした点を踏まえると、みすゞを「児童詩人」あるいは「近代詩人」として単純に分類することは適切ではない。彼女の詩には、「わかりやすさ」と「深遠さ」という二面性が共存しており、その独自の詩的存在を総合的に捉える視点が求められる。

(注)

(1) 堀切実、木原豊美『金子みすゞ再発見：新しい詩人像を求めて』勉誠出版、2014年。

(2) Major A., Meldrum Y. Shell of Moon and Sun. Poems by Misuzu Kaneko: translated by Yukari Meldrum and Alice Major. Independently published, 2019. [in English]

(3) 参照文献：Aries, P. Rebyonok I semejnaya zhizn pri starom poryadke. Izdatelstvo Uralskogo universiteta, 1999. [in Russian] (P.アリエス『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすゞ書房、1980年。【日本語訳】)；Christian Galan, Harald Salomon. Histories of Children and Childhood in Meiji Japan. Routledge, 2024. [in English]；神宮輝夫『児童文学の中の子ども』日本放送出版協会、1974年。

(4) 松本裕子『金子みすゞと詩の王国』文藝春秋、2023年。

(5) 河原和枝『子ども観の近代——『赤い鳥』と「童心」の理想——』中央公論社、2018年。

(6) 畑中圭一『日本の童謡——誕生から九〇年の歩み——』平凡社、2007年。

(7) 注1と同じ。

(8) 田中卓也「近代日本における児童教育雑誌の成立と読者共同体の成立過程に関する研究——児童文芸雑誌『赤い鳥』における読者投稿欄の分析を中心に——」吉備国際大学 社会福祉学部 子ども福祉学科 (研究成果)、2008年。(URL: <https://junsei.ac.jp/conference/confe2008/syoroku/ke08.pdf>、2025年3月5日参照)

(9) Chukovsky, K. Ot dvukh do pyati. Azbuka, 2019. [in Russian] (コルネイ・チュコフスキー『2歳から5歳まで』理論社、1996年。【日本語訳】)

(10) 金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』JULA出版局、2022年。

(11) 高橋美帆「女性詩人の葛藤—クリスティーナ・ロセッティと金子みすゞ」『ヴィクトリア朝文化 研究』第4号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2006年、54-67頁。

(12) 注1と同じ。